

# 「先生の話」に思う

「じゃあ、連絡からするね。」

一年A組の朝の会をのぞいた時に、担任のK教諭は「おはよう！」のあいさつの後に、このように話し始めました。「『先生の話』の最初の話題が連絡からか……面白くなさそうだな」と思って生徒たちの様子を確かめてみると、どの生徒もK教諭の方をしっかりと見つめて何かを求めているような表情をしています。

すると、K教諭は次のように続けました。

「今日は心電図検査があります。皆は、心電図検査ってわかる？心の中を調べるんだよね。『あなたは悩んでいるね』とか『あなたは恋しているね』とかね！」

これを聞いた生徒たちはニコニコし始めました。教室には笑顔の花が咲き、笑い声が心地よいあいづちとなって、和気あいあいとした雰囲気になりました。

もちろんK教諭は冗談を話しています。生徒たちも心の中を調べるのが心電図検査だとは思っていません。K教諭の笑いを引き出してから大切な情報を伝えようとする話の展開に、生徒たちは素直な反応を示したただけなのです。

生徒たちが求めていたものはこれなんだ、と私は確信しました。話題が連絡事項であっても、話し方ひとつで生徒の笑顔を引き出すことはできると私は改めて感じました。さらに私は、こんなことも思いました。

「Aの生徒たちは、笑顔を引き出そうとするK教諭の話術に毎日毎日触れてきたからこそ、『先生の話』がどのように進むのか、どんな面白さがあるのかがわかるようになったんだなあ。そして、それは同時に、冗談と必要な情報を聞き分ける力となり、笑顔と真顔の生まれる朝の会ができたんだ。」

私たち教師はプロです。生徒にどのようなように迫っていくかを、一人一人の教師が独特の方法でもっています。K教諭は冗談を効果的にちりばめながら生徒たちの笑顔を引き出し、テンポの良い話しぶりで生徒たちを無理なく話の本質に連れていく方法をとっています。これは一般の人にはできないことだと私は思います

そのように考えると、自分の担任時代が懐かしくなってきました。私は今のよう堅い話ばかりしていたわけではありませんよ。受けもった生徒たちにはいろんなことを、時には面白く、時には厳しく話してきたつもりです。教え子に会って、たまに「先生、こんなことを話してくれたね」と言われると、最近は妙に切なくなってきました。(話した私は忘れていますが……。)

朝や帰りの会の「先生の話」は、毎日毎日同じことの繰り返しです。しかし、その積み重ねが大切です。話す側は、生徒の意識に何を残したいか、聞く側は、話から何を得るか、そういう「ねらい」のある「先生の話」であってほしいと願っています。(九月七日 記)